

ひと年とせの前、伊太利亜の空気を呼吸すうた――

おれが非情の大河いをくだっていたとき、

おれを導く船曳ふなひきの綱の覚えはもうなかった、

水のように澄んだ空が星を漬ひたし、
星を現像していた。

生長

三才

私に過去はなかった

おれのロイスの裏側
にはプリクラが一枚
貼ってある。

いつの世にも、恐怖と宿命は
大手を振ってまかり通っていた。

僕たちがとうとう自力救済に
乗り出したのは六月半ばのこ
とだった。

四月八日

わたしにとってかけがえのない
ワルワーラさん！
きのうわたしは幸福でした。

ふたつのわが家

二年三組 藤井さゆき

あたしには、わが家が、ふたつ、あります。

フリベツト通り四番地の

ふせい

住人ダースリー夫妻は、

「おかげさまで、私どもは

どこから見てもまともな

じまん

人間です」というのが自慢
だった。

わたし

私たち四人は、

また水入らずで過ごしていた。

ベッドフォード

天は黒雲におおわれ、

真昼は夜となるがいい！

ジーファース おい、ハンスのおやじ、

もう一杯、ブランデーを。

こんなゲームを御存知であろうか。

九月十日、火曜日の放課後。

——あなたの歯が
生まれつきとても
健康であることは
とてもよくわかり
ました。

お父さんがいなくて淋さびしいか、
と聞かれることがある。

騒音そうおんがすべて真直まっすぐに立ちのぼあきつて行くような秋日和びよりである。

陸奥みちのくのまのゝかや原とほけども

おもかげにして見ゆとふものを

万葉集

くっせつりっ

屈折率

七つ森のごつちのひとつが

水の中よりもつと明るく

おほ

そしてたいへん巨きいのに

吾輩は猫である。

「完璧な文章などといったものは存在しない。
完璧な絶望が存在しないようにね」

**私がこの世でいちばん好きな場所は
台所だと思う。**

トタンがセンベイ食べて
春の日の夕暮は穏かです

其れはまた人々が「愚^{おろか}」と云う貴い徳を持って居て、世の中が今のよう^{きし}に激しく軋み合^{きし}わない時分であつた。

はしば　ぎよくせんけん　い
橋場の玉川軒と云う茶式料理屋で、
いっちゆうぶし
一中節の順講があつた。

大地を震わす和太鼓の律動に、
かんだか
甲高く鋭い笛の音が
重なり響いていた。

九歳で、夏だった。

「言ってなかったけどさ、」

あたし、大学行かないから」

何ヶ月も何ヶ月も雨が降り続き、
もしかしたらこのまま雨の中に
閉じ込められるかもしれない。

これより私は、或る個人的な
回想を録しるそうと思ってている。

うらやま

「あの泥坊が羨しい」

けんか

られっ

とうてん

喧嘩と仲直りの規則的な羅列が句点も読点もなく
ノンストップでただつらつらと続いていくような、
そういうお付き合いだった。

一九二五年に梅鉢工場という所でこしらえられたC五一型のその機関車は、同じ工場で同じころ製作された三等客車三輛と、食堂車、二等客車、二等寝台車、各々一輛ずつと、ほかに郵便やら荷物やらの貨車三輛と、都合九つの箱に、ざつと二百名からの旅客と十万を越える通信とそれにまつわる幾多の胸痛む物語とを載せ、雨の日も風の日も午後の二時半になれば、ピストンをはためかせて上野から青森へ向けて走った。

自称変わり者の寝言

「え、ガチで？」

なにが出るかな、
なにが出るかな。

一日二十四時間のうちの一時間。

「コヨーテって一体何？」

世界の隅まで冒険し隊、春の特別編！」

そいはするんとうーちゃんの白いゆびの
あいだを抜けてゆきました。

「スプリットタンって知ってる？」

スコップと丸め
たビニール袋を持っ
て、あみ子は勝手
口の戸を開けた。